

資料紹介

大西家藏番外謡本について

はじめに

番外謡曲の研究——特に資料の発掘——については、丸岡桂、齋藤香村、田中允氏らによって精力的におし進められてきた。わたくし自身も番外曲に対して興味を抱いており、そこに見られる引用詩歌についての調査を発表したことがあるが、このたび、大阪における能楽界の名門大西家——同家は、中興の宗明が岩井家の門人であったところから、岩井派の芸統を伝えており、その文書の重要なものをも所蔵しているとのことである。——の謡本を一見することができたので、それを紹介することにしたと思う。もっとも、披見を許されたのは番外謡曲のみであり、しかも零本ばかりではあるけれども、番外曲の研究にいくぶん資するところがあるように思われるので、ここに、それを取り上げることにしたのである。

西 畑 実

1 第 一 種

二番綴二十四冊四十八番、茶色表紙、中央に短冊型の題簽があり、六行書である。内題もあり、一部は原本に存在した奥書を転写している。その曲名を示せば次のとおりである。(番号は仮に筆者が附した)

- | | | | |
|---------|------|---------|------|
| 1 飛鳥寺 | 惠源太 | 8 ※ 壘 | ※ 明静 |
| 2 座論 | 小林 | 9 蛙 | 玉津島 |
| 3 鄭懸山 | 泣不動 | 10 ※ 籠 | 和国 |
| 4 御崎 | 吉野琴 | 11 ※ 経盛 | 神崎 |
| 5 連獅子 | 文学 | 12 香椎 | 逆鉾 |
| 6 ※ 法海寺 | 五筆 | 13 岡崎 | 鈴木 |
| 7 ※ 狸々前 | 橋弁慶前 | 14 吉野 | 真名井原 |

- 15 武文 馬融
16 住吉詣※貴布禰
17 空蟬 総角
18 満仲 女沙汰
19 草薙 飛雲
20 雪嵐 恋松原
21 侍従重衡※小倉御幸
22 鞠 北山
23 馬乞 真田
24 ※雪頼朝 降魔
- この中には、現行曲——「逆鉾」「橋弁慶前(笛之巻)」「住吉詣」「満仲」「草薙」「飛雲」——も交っており、その他も比較的近い番外曲が多く、僅かに※印を附した曲が稀曲として見出されるに過ぎない。(※印を附した曲は『古典文庫』に、その他の曲は『謡曲叢書』などに翻印されている)
- 書写年代について述べると、その奥に、
- 明和五子十一月中旬御本写(「飛鳥寺」)
明和五子十一月中旬御本写(「酈懸山」)
明和五子十一月中旬御本写(「小林」)
明和五子十一月下旬御本写之(「橋弁慶前」)
明和五子十一月下旬御本写(「法海寺」)
観茂公御秘本(「明和五子十一月下旬御本写(「御崎」)」)
明和五子臘月上旬御本写之(「五筆」)
明和五子臘月上旬御本写(「篁」)
明和五子臘月上旬御本写(「猩々前」)
明和五子臘月上旬御本写(「蛙」)
とあり、また、ある本の奥には、
- 明和六丑正月中旬御本写之(「和国」)
明和六丑正月中旬御本写之(「龍」)

- 明和六丑正月中旬写之(「神崎」)
明和六丑正月下旬御本写(「逆鉾」)
明和六丑三月上旬御本写(「真名井原」)
明和六丑如月上旬御本写(「武文」)
明和六年二月中旬御本写(「玉津島」)
明和六丑二月下旬御本写之(「貴布禰」)
- とあるから、これらの書の成立は明和六年以後であることは明らかであり、「観茂公御秘本」もしくは「御本」を写したものが、現在の大西家本第一種ということになる。観茂公というのは、素謡の創始者たる服部宗巴(福王茂兵衛盛親)か、その子息なる服部宗碩(福王茂兵衛盛信)かのいずれかと考えられるが、この本の書写年代もしくは血脈関係(後述)から推して、おそらく後者のことであろうと思われる。
- それでは、「御本」というのはいかなる書物を指すのであろうか。「観茂公御秘本」を指してかく呼称する場合ももとよりあり得るが、次のような奥書によれば、かならずしもそうとは限らないようである。
- 観佐公観茂公伝授正本 安一写之(「総角」)
観佐公同茂公御秘伝正本之写 安三公御本ニテ写之
于時宝永二年四月廿一日 (「小倉御幸」)
観茂秘本写 安一改清(「岡崎」)
観茂正本写 安藤氏改之(「雪鬼」)
右観茂公正本以写之 又安一本ニテ見合改(「飛雲」)

ここでいう安藤氏もしくは安三公、安一と称せられている人物は誰かというに、多分「福氏門人録」(野々村戒三氏著『近畿能楽記』による)に見える安藤一融(通称三郎兵衛)のことではなからうかと思われる。また、観佐(左)公というのは、十一代観世大夫左近重清もしくは十二代左門重賢のいずれかであろうが、重賢は隠居後京都に居住していたので、後者の方により蓋然性があるように思われる。

安一本もしくは安三本というのは、「観佐公同茂公御秘伝正本之写」なのであり、「総角」「小倉御幸」はそれを更に転写したものであろうし、「岡崎」「雪鬼」は観茂正(秘)本の写しを、安藤氏(安一)が改めた本の、また、「飛雲」はそれに安一本によって校合を加えた本の、同じく転写本だと考えられる。

では、原本の書写された時代はいつ頃の事であろうか。「小倉御幸」は前掲の奥書に続けて

又永禄十二年丁丑(筆者註、永禄は元禄の誤か、また丁丑は元禄十年にあたる)十二月中旬竹村甚公ニテ広茂

又享保十乙巳十月中旬命子息之通令書写 教献
とあり、「悪源太」には、

右観茂公秘本ヲ以テ元禄十一年戊寅葉月上旬写之 奏広茂

又享保六年丑辛六月廿九日改之 釈教献

又同年八癸卯申村氏改清之 又観世織部公ノ正伝ト見合セ

また、「鈴木」には、

観左観茂正本ニテ写之 元禄十四歳己丑五月廿二日祐富書

さらに、「五筆」には、

観世弥公

観佐公観弥大夫公同茂公正本伝授

享保十二年九月廿二日習

と記されている。

広茂、教献ならびに祐富はどういう人物かよく分らない。観世弥公もしくは観弥大夫公と称せられている人物も、いずれ観世家もしくは福王家の血統に繋がる者であろうが、これも誰を指しているのか明らかではない。中村氏は竹村定勝の門人であった中村六右衛門とも、小川高德(服部宗碩の弟子)の門下たる中村登仙(弥三右衛門)とも考えられるが、おそらく前者のことであろう。観世織部公というのは十三代観世大夫織部重記(治章また滋章とも)のことであるし、また、竹村甚公は上記の竹村定勝(甚左衛門)のことであろう。

これらの奥書によると、原本は江戸中期に書写せられていたことになり、観佐正本もしくは観茂秘本、ないしはそれに基づく写本に依拠、もしくは参看しつつ、後人が書写したものが、現在の大西本第一種であろうと推察される。

かように、大西本第一種は、曲によってその性質を異にしているけれども、いずれにしても京観世の系統を引いていることは確かであり、零本群ではあるが、「御本」の本文を比較的忠実に伝えている点が貴重だといえる。

書写した人物の不明な点が残念であるが、臆測を逞しうすれば、

既述のごとく、岩井家の伝書の一部が大西家のものとなっているか
ら、あるいは岩井家の人によって書き写されたのかも知れない。ま
た、大西家の中興の祖が岩井家の門人であったことから、あるいは
大西家の誰かが写したのかも知れない。これらの詞章は、『謡曲
叢書』、『古典文庫』の本文と比較すると、ままた小異が見出される
が、それほど大きな異同はないように思われる。

2 第二種

二番綴二冊四番

1 薄 露

2 隠岐院 安之字

黒表紙で、中央に曲名を記した題簽があり（題簽の用紙は両者異
なっている）、七行書。かつ、薄白、露白、隠岐院赤、安之字白と
いうふうの内題がある。而して、白、赤が何を意味しているかはよ
く分らない。これらは江戸末期の筆写と考えられ、ままた校合が加え
られているが、『謡曲叢書』の本文と比較してほとんど相異は認め
られない。

3 第三種

一番綴六冊六番

浜平均 鞆 小倉御幸 大木 稲舟 松浦鏡

左肩に曲名を記した題簽があり（「浜平均」、「鞆」の二曲と「小
倉御幸」、「大木」、「稲舟」の三番とは題簽の大きさが異なって

いる）、六行書である。いずれも内題はない。ただし、「松浦鏡」
はひどく汚損している。そして、「大木」の奥に

元文三歳四月十五日写

とあるから、この一群の謡本は恐らく元文三年頃の成立と考えてよ
さそうに思われる。活版本（『謡曲叢書』、『古典文庫』）と比較す
るとき、「鞆」、「小倉御幸」、「大木」の三番は小異が認められ
るに過ぎないが、「浜平均」、「大木」の二番は相当違っている。
すなわち、前者は詞章がかなり省略され、また、後者は問答の部分
（ワキの名ノリあとのワキと狂言との問答、中入後における狂言と
ツレとの問答）が記載されているところが活版本とかなり相違して
いる。

4 第四種

一番綴五十二番五十二冊、他に曲舞一冊。（「久世」と題し、湖
の八景 源氏目録 座敷飾 浜荻 高野巻 明ぼの 地主 五常の
八曲が収められている）

左肩に題簽があり、本文は七行書で、内題も存する。書写年代は
近世末期のように思われる。

- 明石上 △足引 ○生捕盛久 ○石神 □市原小町 ○雲林
- 院小町 ○猿通寺 ○小倉御幸 △御駒乗 △景季 ○笠寺
- 革袴 ○久米 △黒池竜神 □恋妻 ○小式部 ○小侍従
- 金毘羅 ○鷲之前 ○更科 ○島廻 □十番切 □上宮太子
- 西岸居士 ○先帝 ○袖の湊 ○卒都婆流 ◎高安小町 ○

- 龍崎 ○誕生寺 □華自然居士 ○櫃切曾我 □一言主 ○人丸 ○富士見小町 ○二本杉 ○豊原寺 ○星降 ○細谷川 ○法華会 ○母衣 △湊川 ○夢想松風 ○賜之草茎 山吹 ○山本小町 □八幡弓 ○幽霊小町 ○雪女 ○良弁 □六角堂 □和国

右の五十二番のうち、○印を附した三十五番は『古典文庫』に、△印を附した五番は『新謡曲百番』に、□印を附した九番は『謡曲叢書』に、また、◎印を附した一番は『謡曲評釈』に翻刻されているから、「山吹」だけが未刊曲ということになる。〔『古典文庫』において、「石神」は「石上」、「市原小町」は「清水小町」として見え、「星降」は「明星山」に一致し、「山吹」は『新謡曲百番』所収『疑冬』とは別曲である〕なお、「山吹」を除く五十一番の曲名はすべて「吉田本外題集」〔『古典文庫』未刊謡曲集三〕所収〕に見えており、それを示すと、次のようになる。

- 六百番目
 1 上宮太子
 2 鷲之前 雲林院小町 小倉御幸 猿通寺
 3 高安小町
 4 山本小町 革袴
 6 二本杉
 8 島廻 那須(母衣) 富士見小町
 9 卒都婆流
 10 八幡弓 倭国

- 11 六角堂
 12 湊川
 13 袖湊 櫃切曾我
 17 夢想松風
 七百番目
 1 先帝 更科 四季(雪翁)
 2 人丸 小侍従
 5 花自然居士
 8 西岸居士
 11 一言主

- 八百番目
 2 金毘羅
 3 法華会
 5 恋妻
 6 笠寺
 7 景季
 9 豊原寺
 10 朗弁
 11 幽霊小町 市原小町 生捕盛久
 12 小式部
 13 鴟之草茎 黒池龍神
 14 久米仙人 石上
 15 駒乘(御駒乘) 誕生寺

20 十番切

九百番目

16 細谷川

20 明星山 竜崎

これによると、第四種本は零本ではあるが、「吉田本外題集」にいうところの六百番目ないしは八百番目に属する曲を主として書写したもののように思われるから、もとはそれぞれ百番ずつ纏っていたものが後に散逸したのかも知れない。さらに、第一種本の大部分が三百番目もしくは四百番目の中に見出されるのに対し、第四種本は稀曲が多い。『未刊謡曲集』の解題によるに、元文写本を除いて、伝本が、「笠寺」および「豊原寺」においては僅か一本、「石上」および「細谷川」が二本、「良弁」「鷺之草茎」「幽霊小町」が三本、「竜崎」が四本、「草袴」「鷺之前」「明星山」は五本、「誕生寺」は六本に過ぎないから、これらの曲を含む第四種本は資料的に重要な存在だと言ふことができよう。

以上で大西家本の紹介を終えるが、零細な写本群であり、しかも、「山吹」を除いて、未讎刻の曲を有しないとはいへ、由緒正しい京観世の本文を伝え、かつ、稀曲をかなり包含している点、番外曲の研究資料として——特に京観世の伝統を探るうえに——重要な位置を占めるのではないかと思うのである。

次に、大西本番外謡曲第四種のうち、「山吹」(未刊曲)、「市原小町」、「雲林院小町」、「高安小町」、「富士見小町」、「山本小町」、「幽霊小町」の七番を原本通りに覆刻することにする。

節附や特殊記号は省略したが、詞の所は「、節の所は「を付けて區別した。(原本は「のみであり、それが原本にない場合もあるが、すべて「または「を附しておいた)

山 吹

次第へ山よりしらむ朝ほらけ、く、春の心そのとけき

ワキ 詞

「是は五条の三位俊成卿のゆかりの者にて候、去子細有ッてか様の姿と成りて候、我此程ハ南都に候ひて、靈仏靈社を拜ミ廻りて候、

又是より玉川井手の里に立越、一見せハヤと思ひ候

サシ 一行

の斜鷹雲端にきへ、二月の余花ハ野外に飛、実やのとけき旅の

空、遠山霞む詠迄、麓ハそこと見へわかつて色の千種も白砂に、芳野

の山を跡にミて

下哥 雲井や遠き雲井坂、はるかに鳥の鳴音かな

上哥 トロ 轟きの橋のゆきけた名にしおふ、く、水の流もいさ

きよき、いくたひぬる、墨染のむかひの見詠の一松、夕いる雲の絶

々や井手の里にも着にけり、詞「急候程に、是ハはや井手の

里に着て候、此のあたりに暫休らハはやと思ひ候、や、荒ふしきや

岸の山吹春風ふきて異香薫す立よりまれハ、色香妙にして常の山吹

にあらず、よしある花と見へたり、一枝手折ハヤと思ひ候

シテ 詞

「なふく、其山吹ハ何しに手おらせ給ふそ

ワキ 「さん候余りに色

香妙に見へ候程に一もと御ゆるし候へかし

シテ 「是ハ仰にて候へ

共、それハ金しべ銀しへとて名ある花をかし無下になおらせ給ふな

よ

ワキ 「扱ハ隠れなき名草を、只いたつらにおらん事のつたなき

よ去なから、なべてならざる女人の御身として、上「此花の謂をの

シテ花ものいわぬ習ひなれ共 ワキハ謂を語る シテ春のそら

上同ハ長閑しな流れすしき玉川の、俊成の御在世の昔を語る恥かしや、凡心なき、草木迄も今さらに、御法をとなふちくの縁、夢はし覚し給ふなよ夜と共にやすらひおはしませ 上ロンギ地

ハ月影霞む春の夜の、まかきしハあれ増る、流れにうつる花かつら花山吹の御姿を シテ上ハ恥かしや我かふるもの姿と、有しに替る草の庵、しはし休らひ給へかし 上地ハ玉川の詠絶せぬ折ミハ シテ下ハきしの蛙も心せよ 上地ハ水底すみて面白き、花の姿よ我ならん シテハさらハお僧にまみへつハ仏果をえんや井出の里 下同ハ詠めつハ見るに心もあこかれて、霞隠れのうす衣袖

もつゆけくぬる、粧ハ弥生すき春もなかはに暮ゆけハ、さそふさくらハ、ちり過て草の庵や夜の雨、山郭公待只に、空なつかしく鳴渡、卵の花さけるしら波に、打よする気色迄春の名残とおもほゆる、きしのかきほに咲乱れ、こかねまじりの山咲ハ、いわぬ色とやとふ人も、なき山影もしたハれて、大宮人も心あらハ、此夕くれハいかならん シテ上ハ来ても見よ、春風ふかハちりぬへき

同ハ駒のあしなみすハ浪がくれ鳴蛙なきけを知るや苗代の、水せきあへすとりに、花を、手折リハと行きて見よや井手のさと、俊成の詠こそ今に恋しき姿なり、又秋の詠には、道こそなけれ思ひいる、山の奥にも鹿鳴キテ、峯のもミちの日にそひて、もろくなり行なミたとも、か様の御詠哥迄心にまかせ口にいふ シテ上ハ後鳥羽の院の御宇かとよ、同ハためしもまれハの年のよハひも、よにこえて九十のかさん給ハる山人の、折袖にはふ菊の露、打

払ふにも、千世も八千世もへにける物とえいりよにも、有難かりし行末を、今まほろしにこたへつハ、古しハを思ハそろにぬるハ袂かな 下地ハ駒とめて マイ シテ上ワカハ駒とめて、猶水飼ん、山吹の花 上同ハ花の露そふ井出のしからミ井手のしからミいてのしからミ シテ下ハ夢の籠もほのくと、下同ハ夢のまかきもほのくと シテ上ハ山吹もまほろしも 上同ハ入相のかねの音 シテ下ハ夕日ものとかかに 上同ハ鳥もねくらをあらそふ折から、つきせぬ詠めや敷嶋の、道しるへせん、御僧よ、道しるへせん御僧とまたまかきに立より、夢の昔に、成にけり

市原小町 音羽小町トモ

次第ハ悟りの外の心をハ、胸なる月や澄すらん ワキ詞「是ハ陸奥衣の閑より出たる僧にて候、我末都を見す候程に、此度思ひ立都に上り候 道行ハ旅路より猶旅立や朝朗、此夕暮の草枕、鐘をしるへに起駟て行路遙に隔来て、名にのミ聞し是を此、清水寺に着にけり、詞「急候程に、清水寺に着て候、心静に参詣申さハやと思ひ候 サシハ夫救世観音の御誓ひ、慈悲第一と聞物を、増てや多年の願望空しからんや、くもりなき世を御恵ミ、荒有難や候、詞「又是成は承及たる音羽山の滝なるへし、実や往昔小野の小町、爰彼処を伶得此滝を詠居て、下ハ何をして身の徒に老ぬ覽、滝の気色ハ替らぬ物を、詞「か様に口号給ひし事、今の様に思ひ出られて候、下ハ荒痛ハしや候 シテ詞「嗚々あれ成御僧ハ何事を仰候ぞ ワキ「是ハ遠国方の僧にて候、此所始て一見仕候、古

へ小野の小町の此滝にての詠哥を、思ひ出られ口号ミ候 シテ「荒
 誑^{ヤサ}しの旅人や、哥の心の奥深き、小野小町の古へを、忍ぶ草の露の
 世に、住かひもなき身ながらも、去^ヤ来^キ跡^{ナツカ}ハ懐^{ナツカ}しや ワキカ、ル
 へけに理りや誰迎も、哀をそふる夕間暮に シテへ露置^{ナツカ}草の ワキ
 へ^カ仮^カ初^カに シテへお僧にま^ミへ申事 ワキへ是も一樹の シテへ緑な
 らすや 上同へ^{ウツミ}哀^{ウツミ}実^{ウツミ}昔^{ウツミ}の花の香をとめて、へ、匂ハぬ袖を歎く身の
 胸の埋火消^{ウツミ}やらす、富士の煙と立登り、行なも知ぬ我カ思ひ忍ふ姿
 も、恥かしやへ ワキ詞「いかに女性に尋申へき事の候、此辺
 りに市原野と申所、又小町の墓所など知し召候ハ、委く教へて
 給り候へ シテへ童も市原野辺に住待ふ、又是より北山本に小町の
 墓所の候、御道指南申へし、上へ此方へ御出おハしませと、野を分^ケ
 衣日も既に ワキへ暮ると思ふ シテへ松かねの 上同へ市原野辺
 の露深き、へ、跡のしるしの名さへ世に、消果しなき跡を、人に
 語らせ給ふなよ、小野の小町ハ我也と、夕への空もかき暮て有し姿
 ハ、矢にけりへ ワキ詞「扱ハ唯今の道しるへせし女性ハ、小
 野の小町の幽霊成そや、上へいざや御跡弔ハんと 上哥へ幾年月
 を古塚の、へ吹^キ来る風も身にし^ミて、哀を添る旅枕重ねて夢を
 待居たりへ 後シテ下へ秋風の、吹につけてもあなめへ、小
 野とハいはし、薄生けり サシ上へ荒有難の御弔ひやな、思へハ
 深き宿縁也、猶も法味に引れつ、罪障をまぬかれん其爲に、今又
 か様に見^ミゆる也 ワキへ不思議やなそれなら、見しに替れる
 其姿、扱ハ小町の幽霊成かや、本来成仏^{ブツ}生死^{シジ}涅槃^{ネパン}、得^{トク}脱^{ダツ}正^{テイ}に疑
 ひなし、詞「去なから古への御事懺悔に語り給へ、猶、御跡を弔ひ

候へし ウツミ同へ^{ウツミ}それ若く盛ん成し時ハ色深く、人の思ひを身に
 請て、文玉^{ウツミ}章の数々に、心を尽す、其中に サシへ殊に思ひ深
 草の四位の少将の、同へ其熱心の身に報ひ、物の化と成り狂気せし
 事、しバへ語るも浅^{アサマシ}猿^{サマシ}や ウツミへ比ハ弥生の半にて、梅の名残
 に桜木の、色香^{アサマシ}静^{シズカ}ふ梢より、春風誘ふこすのひま、深草の少将ハ、
 小町の粧をかいまみしより玉の緒も、消なん物を乱れ髪ゆひよるへ
 くもよすがなく、シテへ責て思ひを現にも、詞へしらせまほしと思
 ひより、便り求て玉章のいつ迄迎か墨衣、碗の水の哀共一向^{ヒタスラ}思ひ
 沈む身を、心強^{ツヨク}くも偽を、誠と思ひ九十九夜、一夜を待^タてて虚し世
 の、はかなく消し少将の、其怨念の今更に身を苦しむる浅猿や
 下地へ去にても マイ シテ上へ去にても、何か歎かん露の身を
 上同へ心とむるゆへ迷ひの雲霧に、真如の月も闇夜^{ヤミ}ぞかし、今又
 お僧の値遇に引れ、胸の蓮の開くる花の、台に至るや極楽の、へ、
 歌舞の菩薩^{サツト}と成にけり

雲林院小町

ワキ詞「是ハ文屋の康秀にて候、扱も小野小町ハ過し比父良実にお
 くれ、中陰^{イナ}の程ハ紫野雲林院にかりに居所をかまへ、物わびしく日
 をおくり申さるへ由承候間、立越とふらひ申さハやと存候 道行
 へ行末も同じ都の内外にて、へ、かげ物ぶかき今宮も猶よそにし
 てしめのゆき、紫野行程もなく、はや日ぐらしのさためなき雲の林
 に着にけりへ 詞「急候程に、雲の林に着て候、是成庵^{ナカ}にて
 有に候、いかに誰か有 トモ「御^ミ前に候 ワキ「康秀か参りたる

由案内を申候へ トモ「いかに案内申候、文屋の康秀の御参りにて候それ〱御申候へ シテサシへきのふもくれけふもむなしく杉の庵に、あす又かくてやありぬらん、世をさる者ハ日々々に疎しとかや、我は夢にも現にも、なき人こふる、泪かな、詞「や、外面に人音の聞え候、誰にても出て見て来り候へ ツレ女「畏て候、誰にて御入候ぞ ワキ「是ハ文屋の康秀にて候か、御住居とふらひの為に参りて候、とく〱御申候へ ツレ女「いかに申上候、御住居御んとふらひの為康秀の是迄御申出にて候 シテ「何と康秀の御申参りとや、はやこなたへと申候へ ツレ女「さらハ此方へ渡り候へ ワキ「久しく見参にいらす候、扱も良実卿の御事世の習とハ申ながら、御愁傷さつして候 シテ「其御事にて候、遠き雲を隔て候へハ、下クドキへいたハリ給ふもいさしらず、此年のくれ程には、必上り給ふへきと、長き月日をかぞへしに、世をさり給ひし音信より、いせをの海士の徒に、舟流したる心地にて、よるべなき身のわひしきよ

ワキ詞「御歎尤にて候、我等も落涙任りて候、扱此程哥をハ御シ読候ハぬか、一首承度〱候 シテ「此比ハうきにたへたる忘れ草、いふことの葉もなければとも、思ひをのぶる便りそと、庭の紅葉にたくへつゝ、下へあハれいかに紅葉ちり行跡もなし、雲の林の、夕くれの風 ワキ上へ哀いかに、もみち散行跡もなし、雲の林の、夕暮の風、詞「あら珍らしの御心ばえや、花もこのミの對して候よ、我等も思ひ寄りて候程に、吟して候へしそれにて御聞候へ、下へ色に出ツる雲の林のもみちばに、詞「露を泪のをきまがひけん シテカ、ルへ実おもしろき心詞、もみちにおける露よりも、袖の泪ハ紅に

ワキ「夕日さし入ル窓の内 シテ「このはちるくる色々に 〱常なき世ぞと人をいさむる シテ「遠寺のかねのつけ渡りて 上同〱つく〱と〱詠淋しき秋のくれ、〱、庭の小薄そよ〱と吹きたり行風の音、心をくたく紫の、雲の林の夕鳥ねぐら悲しき、気色哉〱 シテ詞「いかに申候、今こそ月の出候 ワキ「実〱月の出候そや、さらハ御申暇申さうするにて候 シテ「こよひハ月もくまなく候程に、暫ク是に御申入候いて、心閑に月を御覧候へ ワキ「御しとゞめ候程に、今しばし月を詠め候へし クリ同〱夫浮世の無常を觀するに、蛭蟻ハ朝に生じて夕へをまたず、又夏の蟬の春ル秋をしらぬも、自なる理の今身の上知られたり サシへ然れハ無常の習ひとて、きのふにかハリけふにさめ、夢幻のあだし身を、頼ム命のあるハなく 下シテへなきハ数そふ世の中かに、同〱何れの日迄、歎かまし クセ下へうきながらはや住〱なる〱草の庵に、日数ふれとも色かへぬ正木のかづらくる人も、稀なる夜半にこととふは、風にさき立して、散くる四方の紅葉は、又ハ遠里に、うつも手にとる狭衣の、つづりさせよと鳴虫の、むすばぬ夢を破るらん、実や此程ハ、身に思ひありぬれハ、春の夜とてもねられぬに、ましてや長き秋の夜の、ふけ行鐘をかぞへつゝ、かへらぬ年を忍ふなり シテ上へ徒に、うつりにけりな花の色、同〱我身世にふる秋の露桐の葉落る比なれや、よし更ハさハりなく夜と共月を詠めん、月もはや山のはに、雲がくれす粧はうる転変のありさまの、常々なきをしめす也、あらあぢきな浮世や ワキ詞「秋の夜の長物語に、はや月も入がたに成て候 シテ「仰のことく月も入しほに成

て候、迎の御事に夜を明して御し帰候へ、^{ワキ}「心得申て候、何とやらん今の折から似合ぬ申事にて候へ共、亡父良実卿ハ常は、大和舞に御すき候間、手向にも成候へし一さし御舞候へ、^{シテ}「手向の爲と承候へハわりなく候程に、一さしまひ候へし、^{ワキ}「いかに誰か有、悉ほし狩衣をまいらせ候へ、^{モノキ}「シテ一セイ上へ、^{アセケテ}「穢の声、いづくよりくる出て見よ、雲のはやしのもちがさね、^同「うすもの匂ふ、かざしかな、^{マイ}「上シテ、月の色、風のおとづれおのづから、秋は夕へと、誰かいひげん、^{上同}「去程に、月をめぐらす舞の袂もなびくや雲の絶まより、しのゝめの空も、ほのゝと明行ハ、あさまにやなりなんと、いとま申て康秀ハ、都のかたに帰りけれハ、^{シテ下}「小町は只ひとり、^同「つれなき軒に立そひて、うしろかげを見おくり、行ッハなくさむかたもあり、とまるやうきみなるらん」

高安小町

^{ワキ}詞はハ当今に仕へ奉る、^{瀧口}の何某にて候、^切も昨日月見の御会御座候所に、^帝の御し哥をも衆議判と御定め候去間小野の小町も其席に連りて御入り候を、^{有人}讒をかまへ、^帝の御製を小町様々号みたると奏聞す、^君此由を聞召入られ、^急き河内国高安の里へ籠居させよとの勅定に任せ、^痛ハしなから輿に乗せ、^唯今河内の国へと急候、^{道行}「諸共に出し月社忘られね、^ノ、^都の空を立隠す、^淀の川霧晴やらぬ思ひもかゝるあや簾、^{綱代}の輿のこし方も、^夢や現と隔来て、^爰を関戸の宮ならむ」^{シテ}詞「いかに瀧口に申候

^{ワキ}「何事には候ぞ、^{シテ}「向ひに拜まされさせ給ふハ、聞及し石清水にて御し入候か、^{ワキ}「さん候あれこそ石清水八幡宮にて御し入候へ、^帰浴の祈りに御参詣候へ、^某案内申候へし、^{シテ下}「南無や八幡大井、本地ハ救世の如来、三界我有悉是吾子、^能為救護の御誓ひ空しからず、^無実の難を晴し給へと、^{下同}「共に念誦して、又立出る道の末、^渚の森を早過て、^勇む心ハあらね共、^伊駒の山の麓なる高安の里に着にけり、^{ワキ}詞「急候程に、高安の里に着きて候、^此里の長か方へ御し入候へ、^{さら}ハかう御通り候へ、^{シテ}「切御身ハ是より御し帰候か、^此程の御名残と申旁便なふ候、^{ワキ}「さのミ御敷き候ぞ、^我等も此所に留り痛ハリ申せとの御事にて候、^御心易く思召候へ、^何事をも某に御頼有ふするにて候、^{シテ}「去にても思ひもよらぬなき名をおひ、^{から}き憂目に逢事よ、^下「秋風にあふたのミこそ悲しけれ、^我身空敷成ぬと思へハ、^下同「思ひ慰む方もなき、^伊駒の山の峯の雲、^晴間なき涙の、^雨と降なん露の身ハ、^いかななる草に結ふらん、^庵寒き秋の風、^有し雲井のつてをハ、^わたる鴈にや問へき、^いつ迄かゝる、^古簾都にハなき、^詠め哉、^{ワキ}詞「いかに申候、^{シテ}「何事にて候ぞ、^{ワキ}「古へ在原の業平、^ならの京より此高安の里へ、^忍び妻にあくれ通ひ給ふと承及て候、^かゝる折ならてハ承がたく候程に、^御物語有ッて御し聞せ候へ、^{シテ}「夫ハ遙に年を経し事にて候へハ、^委くハしらす候へ共、^徒然の御慰に語り参らせ候へし、^{シテ}クリ上へ、^夫在原の業平ハ、^平城天皇の御孫、^同「阿保親王の五男、^風月の才に長じ、^帝の御覚へも他に異にして、^今ハ昔にならの京、^春日の里に紀の有常

の娘と契り住給ひしか、時めく花に移り行、虚し心の転手さよ
 サシ花紅葉何れの色にめでぬ覽、同へ此高安の忍み妻に、いつの
 比にか垣間見て、雲の旗手に物を思ひ、明ぬ暮ぬと狂浮て妻木こり
 にし片岡の、ふかき山路と成にけん クセ妹背機関し、有常の
 娘ハ、放髪フウケカミの磯の上、井筒によりて水鏡、竹田の早苗ふし立て、
 色有秋の天つ空、牽牛織女の替らぬ中と誓ひつ、よしや吉野川、
 老と成迄結びぬる、契を余所の夕暮と、此高安に情しる、女の元へ
 通路の、沖つ白波立田越鬼一口も何ならて、閃屍あへる初にハ、女
 も粧ひて、殊勝衣の色々に、薰物すとハ知なから、なべてならさ
 る移香の身にそふまゝに月日経て、シテ上へ稀に高安に来てみれハ、
 へ初め社心憎くも作りけれ、何鹿打解て物の仮粧も疎に、いひがひ
 取りて折毎に、かれひすゝめしすさみにぞ、程なく秋の風立てて、
 もとあらの萩二度、花咲美なる世の例、終のミを忘れて、時の花を愛
 するハ、人間皆酔り誰か色に引かへて、賢きに元く浮世の人を少き
 上ロンギ地へ実や化なる物語、かゝる折ならて、か程委くしらま
 弓、引かへるさを朝夕に頼みて聞や松の声 シテへ立チ別れいなば
 の名残や惜まれん、去迎は高安の、安からぬ身の置所 上地へ理り
 過る身の歎き、暫しハ村雲の、かゝるなき名をおふとも終にハ晴
 ん本の月 シテ下へ今ハ秋の未、菊の宴も早過ぬ、紅葉の賀もや有
 つらん、大内の様ぞ懐敷 上同へ実大内の御遊に、洩ぬ人のいかな
 れハ鄙の住居の妨嫌も、松の柱に竹の垣、柴といふ物折焼きて、つれ
 くゝ侘る涙を何れの時か干へきく、シカく、ワキ詞「や、何と申
 ぞ、都より帰洛の繪旨下されたと申か、こハ有難き勅説哉、嘯急

て御ン拝み候へ シテ荒有難や候、下へ神ハ正直の頭へに宿り給ふな
 れハ、是と申も石清水の、御利生にて社候へ ワキ詞「実々御ン身の
 正直故、神ン明の加護頭れて候、此悦に舞を舞、神を涼しめ給ふへ
 し、折節是に烏帽子の候疾々召れ候へ 物着 シテ上へ嬉しさを何
 に包まん袖の色、烏帽子けたかく嬋娟に、和哥を上げつゝ舞とかや
 上へ唐国の、聖の代にも越ぬへ 上地へ五日の風や十日の雨、
 枝を鳴さぬ、千代の秋 マイ 上ワカへ高き屋に、上りてみれハ煙
 立、民の籠ハ、賑ハひて 上キリ同へ去にても此里に移りし時ハ、
 君をも身をも恨ミ葛の葉の、妬き心も今ハ早、風の前の、木の葉の
 散ルごとく、大津の舟の、網とくことくに、うきを晴して、勇む心
 ハとやの鷹の、二度雲井に立降り、同じ御空の月をも詠め、雪をも
 廻らす、舞の曲、左右颯々の袂を挿して、都に帰るそ、有かたき

富士見小町

シテ男三人 次第へ其名もしるき富士の雪、く、常世消ぬを尋ん
 男詞「か様に候者ハ、出羽の郡司小野良実の御内に仕へ申者にて候、
 又是に渡り候御方ハ、御息女小町御前にて候、扱も帝敷敷の道に
 御情深く、花の朝月の夕何れの御歌合にも召れ、玉寐雲ン上に近
 付、寂慮に叶ふ歌もやと御心を尽され候、されハ哥人ンハ居ながら
 名所をさとすとハ申せ共、誉れ名高き富士山を御覽せ度由仰候程
 に、某御供申唯今吾妻に下り候 サシ立衆へ夫落花の春に名残を惜
 ミ、紅閨の曉には、シテ郭公の初音を待チ、一葉散秋の月に哀
 を催し 立へ庭松の雪に詠め等しく シテ四つの時四つの海 立衆

洩ぬハ広き敷鳴の、道の心の深みとり、空に焦る恋路迄、実情し
 る和哥とかや 上哥へ思ひ立廻るも早き小車の、く、丑みつ比
 に都出、夕附ヶ鳥の空寝にも、閑路ゆるして逢坂や杉のミ繁る守山
 を、跡に美濃路とおよひの橋路にとどろと鳴海瀉く、下へ浪社
 袖に懸川の、浦風音に菊川のあたりを越て遙々と清見か関に着にけ
 りく、男詞「急候程に、是ハ早富士の根に着て候、いかに申
 上候、弓手にそびえし山こそ、世に聞えたる富士の嶽にて御座候、
 御心閑に禪定遊ハされ候へ、シテ「誠に都にて聞及しより、無越
 詠め異成名山かな、実や消ぬが上に降積富士の白雪ハ上へ神代
 の雪や猶残る覽 上岡へ又ハまじろ成ル田子のうらハと詠つるも、
 く、今更おもひ白雲の、たなびく上ハいかならん、見えぬる程
 ハ、高き山哉漸行ハ足引の、山の半に成ぬれハ、余の山を、下に駿
 河の富士の根に、詠めハ多く三保の浦、浪にさらすか衣川、流れ清
 見の閑路迄間ちかき富士の、裾野哉く、ワキ詞「是ハ当社浅間
 に仕へ申申主シにて候、此間ハ所勞仕浅間へ参らす候程に、唯今
 禪定申さハやと存候、又あれに見馴ぬ上臈の、其様由々數粧ひに
 て、かゝる嶮岨のふじの嶽にイ給ふハ、道に迷ひ給ふと存候、嗚々
 夫なる御シ方ハ何かたへ御通り候ぞ、シテ「是ハ都方の者にて候か、
 名にのミ聞し富士の嶽を、多年願ひ深くして、思ひ立にし旅衣、き
 て見る我をとかめ給ふ、御身ハいか成人やらん、ワキ「是ハ当社の
 宮仕也、抑此富士の嶽と申ハ、道ハするどに草木茂り、寒風常に
 はげしく吹キ、御覽のこたく雪の常住成故に、信心深き男の身さ
 へ、水無月朔日ならでハ禪定申事なし、増てや云ん不浄多き女の

身、形ち粧ひ社さもあらんかし、心の雲の晴せずハ、道をそこ共白
 雪の、憂目を見させ給ふへし、疾く御し帰り候へ、シテ「おろかの
 人の仰やな、水無月ならでハ禪定成かたしとハ心得す哥に、下へ富
 士之根の、高き方より秋の来て、詞「麓遙かに靡く朝霧と読るも
 有又、下へ駿河成富士の高根を来てミレハ、麓にかゝる、花の白
 雲、詞「然らハ何迎春夏秋の隔あらん、ワキ「流石都人迎賢き哥の
 縦へ哉、とにかくに着情深き女人の身、今更何と遊るへき、只ミ
 是より御し帰り候へ、シテ「猶も愚かの仰やな、クリへ夫我朝根元
 の主、伊勢天照皇太神も、本地ハ女性にておハします、サシへ中ん
 づく当山権現も、元ハ賤しき賤の女の、同へ翁か情に養ハれ、終
 に生立ッなよ竹の、世に并ひなき、美女とかや、ケ下へされハ皆
 人の、思ひのほむら消やらぬ、富士の煙の風に靡く、行るもしらす
 まどひして、見まくほしきと夕暮の、鐘に驚き曉は、鳥の鳴ケ音を
 恨みつ、親の諫め世のそしり、しらぬ恋路に踏迷ひ、心を尽す蟹
 小船三つの難題かなひなはとげんと云し下紐の結び兼たる折からに
 上へ忝も大君、寂聞ありて余所にのミ、同へ見てややミなん白
 雲の、隔てつらき舟橋や、親しさけすハ東路の、さのミハいかてつ
 らからん、入内なすべき詔り、宣旨下されまします共、此姫凡人
 ならされハ、天の羽衣稀にきて、人のうらみハよしなしと、本の都
 卒に行水の清き姿のかくや姫、今此山に跡垂て仰となか知さらん
 上ロンギ地かゝる不思議を木綿四手の、神の音を宣ふハいか成人
 にてましますぞ、シテ上へ伝ず共それぞと色に出船の、引手数多の
 色好む、小野小町ハ我也、地へ身をうき草の根を絶て、誘ふ水あら

高いなんとハ実虚人の虚し夢 シテ上へぬれハや人の見へつらん
 地へ覺ざらましを シテへ曉の 下同へしのゆめ東迄、我詠じつる
 哥の道、しるや白玉か、何そと問し都鳥、都に遠き富士の根の、人
 の情ハ有明の、傾く影に我ながら、其言の葉の色に出語るそよしな
 かりける ワキ詞「扱ハ小町にてましますかや、然らハ哥をよミ
 舞曲をなし、神シ慮をすゞしめ御申候へ シテ上へ大かたハ、月を
 もめでし、是そこの 上地へ積れハ人の、老となる ハノマイ
 上同へいくよ語ると名残は尽し、月弓の シテ上へ引帰らんと、思ひ
 立 上同へ麻衣の薄きえにし、うら紫か葛の葉の、吹返し吹返す、
 舞の袂に落くるハ、松の風滝の水山彦のミに答へさせ、それかあら
 ぬか秋霧の、麓に生る村ずき、ほのくの空晴で、雲井の都に帰
 りけり

山本小町

次第へ秋の野深き山かけて、くく、千種の花を尋ん ワキ詞「是ハ
 摂州山本の何某季長にて候、我草ウ花に心をよせ色々の草花を数多
 持て候へ共、猶珍敷草花を求めん為、只今山野に出ハやと存候
 道行へ野狩する人の心ハさまの、鶺鴒に身をややつすらん我ハ
 それにも引かへて、露に越居の袖のミか、露にもぬるす野を
 ハたとりくも尋行く ワキ詞「いかに誰か有、あれなる薬屋
ヘトの辺りに白ふ見ゆるハ何なるそ、急き見て来り候へ シカく
 何と白菊と申か、さらハ立寄なかめうするにて候 ワキ上サシへ実
 や時しらぬ山はふしの根いつとてか、鹿子斑に雪の降といへり、

所せきなる山陰の、雪かと思ゆる白菊は、富士の根よりもいやます
 そや、荒うつくしの花や候 シテ老女詞「なふく其色へは何とて
 立寄せ給ふそ ワキ「是成白菊のあまりに見事に咲乱れて候程に、
 詠入て休らひ候、扱御身ハ花の主にて候か シテ「さん候此庵にし
 ハし心をとむる共、心を花になさくれハ、花の主といひかたし去な
 から、昔の秋を残すのミなり ワキへ実や伊勢物語にも、心の色は
 紅るに、匂ふか上の白菊の、上カ、ル枝もとをくふるかとも見ゆ
シテへ男ハしらす説に説ける ワキへ匂ふか上の白菊ハ シテへ折
 ける人の袖の香と ワキへ此方にくつるふ色をとハ シテへ花物い
 ぬ草の庵の ワキへ主をいかて シテへとふへきや 上哥同へむか
 し男の心をは、くく、見んとて菊のうつろへる、枝に哥をハ掛帯の
 唐衣袖朽て、枯々になる中となり昔恋しき和哥の友く ワキ「如
 何に主に申候、最前よりの言葉の末、只人のおちふれたるとは見え
 申さす候、又昔恋しき和歌の友と承候、其歌人の品々を語り給へ
シテ「童ハ和哥の道ハ知す候らへ共、人の語りつる事をあらく申
 候はん 上クリ地へ夫風賦比興雅頌ハ、そへかぞへなずらへ、
 たとへたごといはるとて、六義の様はかくのことし シテサシへ彼
 在原の中將ハ、同へ心あまりて詞たらず、しほめる花の色なふて匂
 ひ残るに異ならず シテ下へ遍昭ハ哥の様ハえたれ共、同へ誠すくな
 したとへハ、絵かける女の姿にめて、いたつらに、心動すことく
 なり 下クセへ小野小町ハ衣通姫の流なれハつよからぬ哥の風情
 にて春風の吹乱れたる青柳のいとよハノと説とかや 上へ大伴の
 里主ハ 同へ山人の薪ハとらて徒に花に心をとくめて木陰に日

をや暮すらん窓の心の何とてか哥の種とは成ぬらん

ワキ詞「か

様に委く語り給ふ、御身ハいか成人やらん

シテ「荒むつかしの仰

やな、衰へはつる老か身の、上カ、ルへわか身を何といえばえに

ワキ

何かさのミつみ給ふ、唯々名乗おはしませ

シテ「実此上は

稲庭 薬屋の床に敷鳴のシテ道忘れぬおか身の、小

町といはんも恥かしや

上岡へ扱ハ小町の果なるか、実痛ハしの

御事や身を浮草の根をたへて

シテ上へ今ハ誘はん水なくハ、泡と

消つ果もせで

上岡へならかへ来ぬる年月を送り迎へて老か身の、

今ハいつしか朽果る袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の、涙かな

ワキ詞「如何に老女へ申候、伝へきく五節の舞まなふて御見せ

候へ

シテカ、ルへとかく辞するによしそなき

様ハ

シテ豊岡姫の舞の袖

ワキ返も

シテ舞とかや

地

祝てのたまはく

序ノマイ

上ワカへほぎて宜く宝鏡を見るに

地上

我を見ますがことくせよ共らに御殿をひとつにして、いはるの鏡と

なすへしとなり

下カ、ルへ雲の上なる音楽をまなふ

上岡へ姿ハ空

おそろしや、語るとも尽し

シテ下へ松の葉の散つもる

下岡へ

く、

わら屋の軒にたすめハ、名残つきせぬ季長も、暇申てかへ

りけれハ

シテ下へ小町ハ跡に

上岡へ只ひとりひとつ世に、捨られ

たる有様かなすてられてひとり残りけり

幽霊小町

ワキ詞「是ハ諸国一見の僧にて候、扱も我大和路の名所旧跡拜ミ廻

り、今日は竜田の明神に参り候、是より河内越へにかかり、都へ上

らハやと思ひ候

道行へ竜田山いかに時雨の染分て、

にましる下紅葉分暮しつづつ行程に、墨の衣の袖寒き、嵐の音も高安

の里にも早着にけり

とやらん申候、彼在原の業平此里に通ひ給ひしを、夜半にや君か独

り行らんと詠しけんも、此所の事成へし、人來りて候ハ、委く尋

ハやと思ひ候

シテ「喃々御僧ハ何事を仰候ぞ

ワキ「是ハ諸国一

見の僧にて候か、竜田の明神に参り初て此所に来りて候、

辺の人に

てましまさハ、業平の古へを語つて御聞せ候へ

シテ「いや我カ

ハ何国共定めなき世の中に、

下へかく衰ふる姿と成て候、

詞「然

れ共我も故有身にしあれハ、其なき跡の恋しきに、是迄参りて候也

ワキカ、ルへ不思議やなきしも老女の御事なるか、

其業平のなき跡

を、是迄尋給ふ事、

詞「扱ハ御身ハ

百年に一年たらぬつくも髪

と、詠せし人にてましますか

シテ詞「夫ハよしなき昔男を、思ひ

染にし色好ミ

ワキカ、ルへ実其女歎きぬとて

シテ下へさむしろに

衣片敷今宵もや、恋敷人におハでのミねんと

下岡へ恨怩ぬる言

の葉を、哀と思ひ仮枕、一夜の夢そはかなき

上岡へされハ彼業

平ハ、く、思ふを思ひ思ハぬ人も思ふなる、情の道も浅からぬ、

実や有し世を、忍ふもち摺誰故に、心の乱れ、成らん

ワキ詞

「いかに老女、御身の風情詞の末、唯人とハ見え給ハす候、包ま

ず名を御名乗候へ

シテ「恥しや我を何とか岩代の、待事もなき浮

身ながら

クリへ枕より跡より恋の責くれハ、

同へ心の外なる昔

語、現もなやな浅ましや

サシへ凡小町に心を懸し、人の数多の

恋衣、同へ恨みの数の重りて、消だに果ぬ身を怨き

クセ下へ在原

の業平ハ、凋^{シホ}める花の色なふて、匂ひ残れる哥^タ人^トの、心詞の奥深く、秋の野に篠分し朝の袖よりも、逢てぬる夜ぞひち増りけると、読おこせたりけれハ、流石^{サガシ}に我も梓弓、いかにといはん方もなく、誰大方のことくきに ^{シテ上}見るめなき、我カ身をうらとしらねはや、同^ヘかれなで海士の足たゆく、通ふ心を荒磯の松ハ難^{ツレナキ}面色見えて、終に虚なる中なりと、憂名に立し古へを、語るも昔男我名ハいはじつゝましや ^上ロンギ地^ヘ今ハ疑ふ所なく、其名にふれし小野の小町、夫ハ去にし世語を今見え給ふ不思議^{ウツクシ}さよ ^{シテ}包め共、袖にたまらぬ白玉ハ、昔恋敷^キ涙の雨やしくるゝ竜田山 ^上同^ヘ夜半に通ひし跡とめて、此高安に来てまれハ ^{シテ}里ハ荒^レにし松風の ^地音のミ残る ^{シテ}草の陰に ^下同^ヘ誰かつるに行^ク道とハ兼て知へきや、今ハ是迄ぞ御僧、今宵ハ爰に待給へ、重ねて姿を見ゝえんといふかと思れハ、失にけり[〜] ^{ワキ}詞「扱ハ唯今の老女ハ、疑ひもなき小野の小町にて候、哀や実も百^モ年^セ迄、輪廻の業^{ゴツ}をまぬかれ給ハぬ事の痛ハしさよ ^上哥^ヘいざ巾ひて浮へんと、[〜]、草の莖を敷妙の、枕の月の終夜、^{ヨモスガ}此御経を、誦誦する[〜] ^後シテ^下上^ニモ^ヘ荒有難の御巾ひやな、妙なる法を身に受て、仏果に至る此上ハ、何をか今ハ憚りの、小町か姿を顕すなり、去にてもなき跡を、小野とハいはじ薄生けりと、問れし我も其人も、友に昔に業平の、其面影にうつり舞の、老の姿ハ恥かしや、^下よし夫迎も報謝の舞、^同紅葉を挿す、袂哉 ^{マイ} ^上ウカ^ハ心さへ、誘ハれ行か竜田の山風に ^同妄執の雲晴て、真如^{スミヤカ}の月の、明らけき有様是々見給へ有難や ^下キリ^ヘけに今よりハ迅

に、迷ひの里を立出て、本の覺りにかへる人、かぞへすよまず多けれど、心の奥を尋ぬれハ、同じ蓮に至るへき、遊^{ゾニモ}ハ嬉しかりける

執筆 者 紹 介

原 田 芳 起	本 学 教 授
久 保 重	本 学 教 授
西 畑 実	本 学 助 教 授
嘉 部 嘉 隆	本 学 講 師
竹 内 美 千 代	本 学 兼 教 授
山 本 和 子	本 学 講 師
竹 島 智 子	本 学 助 手
西 村 典 子	本 学 国 文 科 学 生
佐 野 寿 子	本 学 国 文 科 学 生

（本学国文科
昭和四十四年三月卒業）